

戦争と原爆を語り継ぐ

越智 晴子（当時22歳、広島で被爆）
札幌、故人



戦争が終わって

私は生来ポーっと育ったほうでしてね、よくそのような私がこのようにして、運動というような運動ではないんでしょうけど、自分で体験した核兵器、使ってはいけないということと、戦争は絶対にしてはいけないという信念を持ちまして、今日まできたのは一体なぜなのかと思うことがあります。

広島、長崎に原爆が落ちまして、日本が無条件降伏で、ほんとに長く苦しかったガマンガマンの戦争が終わって、あの日から61年経ちました。戦後は還暦を迎えたということですね。61年という年は考えると長い年月なんですけど、何かあつという間に過ぎたように思います。

1945（昭和20）年8月15日に、戦争を終結するという、はじめて聞いた天皇の声ですね、とても聞きずらかったんです。あれは非常に女性的で甲高くて、言ってる言葉と読んでいる文章も分からない。そこに、あれは故意に雑音を入れたんだと思うんですけど、全国どこでも「雑音が入ってた」と言われましたからね。けれども、全身の神経を傾けて聞きました。終わってから、みんな「日本は負けたんだ」と、日本は降伏したんだということ分かったときに、一瞬これからどうなるんだという、なにか恐怖が走りまじったけども、ほんの一瞬のことでした。その次に思ったことは、ああ、これで空襲がなくなる、もうアメリカの飛行機はこないんだ、夜寝巻きを着て大の字になってお布団の上に寝れるし、それから暑い夏でも雨戸をしめて、そして明かりが外に漏れないようにして過ごさなければならなかったのが、窓を開けて、パーッと電気をつけて、あー今日からそれが出来るんだと思うことの方がうれしくて、戦争

が終わってこれからどうなるのかということは二の次だったように思います。

でも、日本がはっきり負けたということが分かるときに、私の兄は軍隊の医者だったもんですから、将校には当番がつくんですね。その当番が九州出身の人で、その人はこう言うんですよ。「この戦争が終わって軍隊が解散になったら、私は九州に帰って、山の中に自分の家内を隠す」と。それで、兄が「貴様はシナ（中国）の戦場でさんざん悪いことしたんだろう」と言ったら、「しました」と言うんですよ。だから、九州に帰ったら「女房は山さん隠しますバイ」、九州の言葉は何でもさんをつけるんですよ。私はそういう話は初めて聞いたのでびっくり仰天ですけども、それが戦争というものなんだと、初めて実感したわけですね。

戦時中のくらし

私はいま83歳ですから、小学校3年生のときに満州事変が始まりまして、戦争が終わった年に22歳でしたから、あの十五年戦争を全部体験しているわけですね。

1940（昭和15）年9月に父が死んだそのとき、皆さんがお供えしてくださったお菓子を後で食べたら、それまで白砂糖だったお菓子が黒砂糖になってるんですよ。おかしいね、とそんな話ちょっとしたんですけど。それから段々と物資がお店から消えましてね、そしてすべてのものが配給に。配給ってのは十分なだけ配給してくれるわけではなくって、神戸に住んでましたから、特に神戸のような都会は非常につらかったですね。私どもがやっているノーモア被爆者会館というところは、学生さん達が来てお話するときに、その配給という言葉、分からないんですよ。こういうものだということで、配給でないのは何かっていうと、お水と空気だけだったという、そういう時代を過ごしました。

都会ほど物資がなかった、よくああいう生活を耐えてきたなと。例えばお米が配給になって、今だったら私は年で、1回に1合のご飯を3回ですけど、あの頃1日に2合3勺配給があったと思うんですけど、あの頃は倍以上の食欲があったから大変でした。どうするかというと、10倍くらいのお水の中に入れて、煮立ったらお鍋を火からおろして、お布

団やなんかで囲うんですよ。何時間も置いたらいわゆるバクダンになるんです。10倍くらいにふやけた米、満腹感なんですね。そういうことをした、何ともいえない悲しい時代があったことを思い出します。

神戸空襲

神戸というのは全体が坂のマチなんですけど、私の家はちょうど坂の中腹あたりにありました。1945年の3月と6月に大空襲があったわけです。それまでは、工場とかそういうところをしょっちゅう爆撃してたんですが、3月と6月の空襲というのは本当の無差別爆撃ですね。たくさんの方が死にました。3月のときは何キロも先の坂の下の方に爆弾を落として、見てると、アメリカの飛行機が2つに割れて落とされたり、火の出るのが見えてました。その何キロも先から火の粉が飛んできて、その火の粉を弟と2人で、竹の先に縄をつけたもので消して歩きました。そのときは守られたんですが、ちょうど私が原爆にあう2カ月前の6月、このときは360機来ました。あっという間に家が焼けましてね。で、東京が3月10日に大空襲があって10万人の方が亡くなったんですけど、あの時きた飛行機は300機だったそうですね。だけど夜中の空襲ですから皆さん大変な思いをされたと思うんですよ。神戸は朝でしたが、360機来て6000人以上の方が亡くなっているわけです。

あの時は、庭で待機していたら、飛行機が頭の上に来ましてね、慌てて庭に掘った防空壕に飛び込みました。2階の屋根を貫いて焼夷弾が落ちてきて、家がどんどん燃え出してるわけですね。そのとき、ほんのわずかの差で焼夷弾の直撃をまぬがれて、危うく命拾いをしました。私が戦争で1回目の死の淵をのぞいたのがその時ですね。



神戸空襲 炎上する神戸ドック
1945年6月5日

その日の広島

7月の初めに、兄が広島の軍隊の軍医だったものですから、どうしてもそこに持っていかなければならないものがあるんですけど、切符なんか自由に買えないんです。軍隊から官報という電報をよこしましてね、それを持って駅で切符を買うんですね。神戸から広島というと山陽本線で行けばいいんですけど、それも買えなくて、ずーっと日本海の方を回って、鳥取まで行って、そこからまた広島まで、大きな荷物を持って行きました。

広島に行ったら、飛行機はくるんですよ。毎日のように、何機かね。ところが絶対に爆弾も焼夷弾も落とさないんです。広島は軍都だから落とさないんだと思っていたんですが、後で分かったことですが、それは世界で初めて作った原子爆弾を、広島が一番の候補地だったわけですから、広島に落とすのに、落とそうとする爆心地のその周りに、どの時間に一番たくさんの人が出ているのかということを調べるために、しょっちゅう来ては航空写真を撮って統計を取ってたわけです。それが朝の8時15分という時間なんです。

その時間というのは、建物疎開と言いまして、空襲のときの火災に備えて家や建物を壊すんですね。おじいちゃんやお母さんたちの壊した建物の後片付けをするため、当時の旧制中学校や女学校、小学校高等科（今の中学1、2年生）の男女生徒が8400人も狩り出されていたわけです。繁華街でしたからね。それから町内会の人達も出てる。軍隊では兵隊さん達が上半身裸で体操している。夏休み中でしたが、兵隊さん達が戦地に行ってるということで学校はやってたんですね。小学校の校庭では3年生以下の子ども達が（4年生以上は田舎に疎開させていました）校庭で校長先生のお話を聞いている。広島駅には、近郊の町や村から、市内に勤めをもっている人達がどっと降りる。そういう人のたくさんいるところを狙って、原子爆弾がどれほど威力があるのかということはあるが、その威力を試すために人間をモルモットにしたということが、私にはどうしても許せないわけですね。本当に腹が立ちました。人をモルモットにしてこの新型爆弾を使ったということは、絶対に許して

はいけないことだと私は思うわけです。

甥と兄の死

あの日の朝、8時15分、前の晩に空襲があるということで、一晩中防空壕の中にいたものですからね、出て来て暑くて、兄は半ズボン1枚でしたね。兄嫁も私もワンピースで、4歳の甥がおりましたけど、その子はやっぱりパンツひとつで、ご飯を食べ終わりかけたときに、飛行機の爆音がして、変だ、と思ったそのときに……。

私は庭の方を向いて座ってたんです。その庭の一段低くなった向こうに山中女学校という学校がありまして、その校庭がいっぱいになるほどのものすごい火の玉が飛び散りました。私は、アッ、太陽が落ちた、と思ったんです。それほどひどい火の玉でした。で、原爆のことをよくピカドン、ピカッと光ってドンという音がしたというんですけど、私はそのドンという音は聞いてないんです。それで、アー太陽が落ちたと思ったら、爆風で石が飛びましたね。それから何回か爆風が来て瓦礫が体を埋めて行くわけです。そのときも死を覚悟しました。でも太陽が落ちてくるなんてことあるわけがない、神戸の空襲とは全然違うし、一体なんだろうと思いましたね。

爆風がやんで、やっと瓦礫から這い出して見ましたらね、暗くなっておりましたが、見わたす限り竜巻が来て家を壊したような状態でしたね。で、私は助かったけどお兄さんたちはと前を見ると、兄夫婦は血だるまになっておりました。私の横にいた4つの甥が3人ぐらい吹っ飛ばされてひっくり返ってお腹が裂けて枕木がのっておりましたね。爆風は爆心から1秒間に401kmの速さで吹いてきたそうで、私の兄の家は爆心から1700kmのところでありましたが、そこでも1秒間に72km、おとし札幌で台風がありましたね、そのときの倍以上の速さなわけです。



生前の兄と甥

甥はお腹が裂けて、腸が出ているから助からないと兄は言ってましたけど、頭にはガラスが入ったまま、4つでしたから放射線が体に入ると抵抗力がなくなるんですね。一時元気になっておりまして、「大きくなったらこのガラス、父ちゃんが取ってくれるの」と言ってましたけど、段々と抵抗力がなくなって、9カ月生きておりましたが、母親の手の中で、段々段々と弱って行って冷たくなると、兄が言っておりました。

兄も、自分が医者でありながら自分の息子を助けてあげられなかったという事と、ビルマの戦場にいたことあるんですね。そこで本当に戦争というものにはむごいものだという体験をしたらしくて、一言私にそう言ったことありました。本人も原爆で大怪我をしまして本当に骸骨のようにやせてしまいましたけど、息子が死んだ1年くらい後に自分で命を絶ちました。私はその頃北海道におりまして、心臓麻痺で死んだという手紙をもらいましてね。実際、そうだと信じていたわけですが、10年も経って叔母から真相を聞かされたとき、もう、私は本当に言う言葉がございませんでしたね。

甥は原爆に直接殺されたと思うし、兄も間接的にはあるけれども、この戦争のために殺されたんだなと思ってるわけです。

原爆症にさいなまれー

私自身、後で調べたら40ぐらい傷がありました。兄の部隊に連れていってもらって助かったんですけども……。

戦争が終わって、8月の末頃母のところへ帰りました。その後、体の中に入った放射線がいたずらをしましたわけです。原爆ぶらぶら病という症状があるんですが、広島、長崎で原爆の放射線を浴びた人たちが被爆者というんです。だから、直接被爆しなくても、入市して残留放射線を浴びた人たちも被爆者ですし、お母さんのお腹の中にいて、お母さんの浴びた放射線の影響を



23年たって肘から出てきた
ガラス片

受けた人も胎内被爆者といって、被爆者なんですね。一番恐ろしいのは、そういう原爆が爆発したときに放出した放射線なわけです。その放射線のために、原爆ぶらぶら病という症状が出まして、もう全身が痛いのかだるいのか分からない、ともかく手も足も鈍（ナタ）でもぎ取ってもらいたいと思うほどの苦しさでした。でも、神戸で空襲を受けたときも死ななかった、原爆を受けたときも死ななかった。だから、自分は運のいい人間だから絶対に死なない。疲労が重なってこうなったんだろうと思ってたんですけど、そのうち口の中が腐ってきました。物が食べられなくなったので、私もいわゆる原爆病という症状になったのかと病院に行きましたら、「白血球も非常に減っているし、上からの触診でも分かるほど脾臓が腫れているので入院してください」と言われました。家のものには「おそらく助かりません」と言っていたそうです。

それが今ここにこうしているというのは、弟が走り回って薬を探してきてくれた、そのおかげと思うんですけどね。

傷が治って1カ月くらいで退院できました。退院する朝、看護婦さんから「先生はもう助からないと言ってらしたわよ、よかった！」と言われました。私は何と運のいい人間なんだろうと思いました。

被爆者の要求

やがて夫が中国から帰ってきました。夫が北海道の人なので、この北海道に来たんですけど、北海道には親もいない、兄弟も誰もいない、知っている人がいない。そういうところへぼんと入った気苦労というか、精神的な苦労もあるんですね。原爆症が治った後も、何ともいえないだるさ、どういったらよいか分からないものでした。けれども嫁として気を遣わなくてはならない。夫の兄弟もおりましたし、そういう中で、本当に地獄でしたね。夫がいたからでしょうか、ポーッとしてたからでしょうか、そこでがんばりました。

1959（昭和34）年の秋、夫の病気のため札幌に出てきたんですけど、その翌年に北海道の被爆者の集まりがあって、そこへ出席して被爆者の会に入りました。何も手伝いが出来なくていたんですけど、離れることが出来なくて、ずーっと寄り添っていたわけです。それがいつのまにか

会長というものにさせられました。今こんな83歳になって会長しているような会はないんですけど、被爆者の会ってこういうものなのかねって、そう言ってるんです。

ご存知だと思うんですが、ひどくきつい放射線を浴びた人たちは早くに死んでしまいましたし、低い放射線を体の中に持った人でも、そういう線量の低い放射線は人の体の中に入って何十年もかけて細胞を壊していくんだそうです。だから、今まで生きてきた被爆者は必ず最後は癌で死ぬと言われるわけです。被爆者が今、どんどんどんどん癌を患い、そして心臓を患っています。

だから私たちは、私たちの病気は原爆の放射線のためと認めて下さいと申請しているのですが、国は「あなたはどういうところで被爆したのか、入市の被爆者は関係ない」と言うんです。関係ないという根拠は何かというと、アメリカがいろんな実験をしたときの資料なんです。非常に克明にやってるんです。それを世界が認めていると言って、被爆者の申請を認めないんです。

それでは仕方ないということで北海道はじめ全国で裁判に訴えた。それが、この5月12日大阪地裁で、被爆者の全面勝訴というべき判決が出されたのです。被爆者を診ている医者とか物理学者の証言は国が反論できないほどの立派なものでした。

また、先日ですね、8月4日には広島で41人全員の勝訴の判決が出され、非常にありがたく思いましたが、国はすぐ控訴しました。

国というのはね、自分達に痛くも痒くもないからこういうことするんでしょうけども、私が被爆者で言うのはおかしいけど、本当に被爆者は貴重な存在だと思うんです。こんな体験は二度とさせてはいけない。

語ることへの思い

でも、被爆者は皆いろいろな思いがあるから、言いたくても言えないんです。私は、最初は一生懸命お話してきたけど、やっぱり遺伝のこととか、いろんな問題が出てきて、なぜこんなことしゃべってきたのかと思ったことありました。それで、一時しゃべれなくなったことありました。でも、ベトナム戦争のときですが、アメリカの少年のような

顔をした若い兵士が北ベトナムの兵士の首を切ってね、その生首を下げて非常に不気味な顔をして立っている写真を見たんです。そのときに、これが戦争だと思ったんです。戦争と言うのは人を殺す、殺されることしかないわけです。個人的には憎しみも何ともない人を、戦争だといって殺していたら、人を殺すことが何でもなくなる。戦争とは人間の理性をここまで駄目にしてしまうものなのかと思ったわけですね。それで、私は空襲からも原爆症からも運良く助かったことが、そうではなく、命を与えられたのだと、「あなたに命をあげるから、人間が再び恐ろしい罪を犯さないように、一生懸命自分の体験を話して、戦争とは、核兵器とはどういうものかという事を伝えていきなさい」との神様のおぼしめしなのだったと思ったわけです。

いろいろなことしゃべるのは、子ども達にかわいそうだと思うのですが、そんな私の思いに固執していたら、自分の子どもや孫だって同じ思いにあうんだということに気がつきまして、それからまた原爆を語るようになりました。本当に、もう語らないですむことだったらこういうお話したくないわけですね。でも、やっぱり子どもや孫達も、私が原爆を浴びたためになっただけではないかという病気に次々なっております。非常につらいことです。だけど、だけど、私は口を閉じることが出来ないんですね。

戦争と核兵器を許さない

原爆で、一瞬でつぶれた広島を逃げる時に思ったことがあるんです。それは、兄が「一発で広島を全滅した。逃げてくる負傷者は自分がいたビルマの戦場で見たこともないような姿のケガ人、これはきっとアメリカが何かすごい威力のある新型爆弾を開発したんだろう」と言っていたことです。そうですよね、全身やけど、生皮焼かれ、火の玉になって走ってくる、目の玉飛び出されそれを受けてくる、普通見ることが出来ないような姿なんです。ですからあの広島を逃げながら、何という恐ろしい爆弾をアメリカは作ったんだろう、こういう爆弾1つで広島がなくなるんですから、2つ3つ落とされたら日本はもう駄目になってしまふ。これまでもたくさんの都会が空襲でやられてるんですか

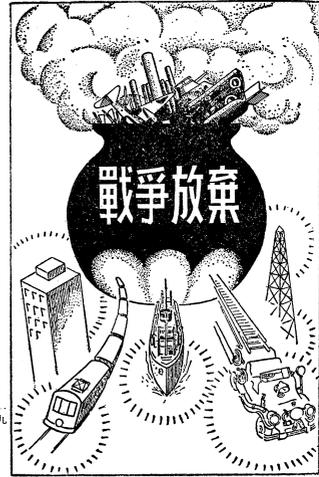
らね。日本が戦争に負けたらこれで戦争は終わる。戦争が終わったら、世界の国々は、この新型爆弾の存在を知るだろう。人間がこういうものを作ったとしたら、もうお互いに、どんなに人間が違って、すぐ戦争という手段をとらない。粘り強く話し合いをして解決するような世界が出現するだろうと私は思ったんです。そして、私は40くらいの傷がありましたし貧血で目の前が朦朧としてたんですけど、それでも兄の部隊まで4キロの道を歩いて逃げたんです。おそらく助からないって……。

この新型爆弾のモルモットになっても、これを機会にこの地球上から戦争がなくなるんだったら、私は笑って死のう、と思いました。

ですから新しい憲法が出来て、戦争をしない、武器も持たないって、この平和憲法が出来たときは本当にうれしく思いました。自分の体はその後もとってもつらかったんですけども、本当にうれしかったですね。その世界に誇れる憲法をね、また戦争をする国に回帰するという動きは、私は本当に恐ろしいことだと思うし、どうしてもこれは、命をかけても反対しなければならぬと思っています。

戦前戦中戦後という言葉がありますけども、戦後61年たって、私は、またね、日本が戦前に戻っていくような気がしてならないわけですね。そして今度そういうことが起きたら、私たちが体験した戦争どころではない、ひどい体験を皆がしなければならぬと私は思うわけですね。それで、私たち被爆者が一生懸命訴えるわけです。「私たちのような被爆者を二度と作らないでくれ」「核兵器を地球上から一日も早くなくしてくれ」と。だけど日本の政府はね、「日本は世界で唯一の被爆国です」と言うんですけど、その後何も言わないわけですね。

唯一の被爆国で、被爆者が訴えているんだ、世界の人の、この話を聞け、だから核兵器をなくそうじゃないか、そうやって日本は世界にイニシア



文部省『あたらしい憲法のはなし』(1947.8)より

チブを取る資格があると思うんですよ。でもそれをしてくれないわけですね。

私は思います。正義の戦争ってのはない。やっていい戦争も、やらなければならぬ戦争もない、と。

子どもたちに伝えたいこと

私がよく子どもたちに学校でお話をするときに、戦争とはどういうことですかって聞くんですね。子どもはいろんなこと言いますが、中に、「人殺し」と言う子がいるんですね。そういうときに私ほっとするんです。

「戦争というのは人を殺すか、殺されるか、それしかないんだ。正義の戦争なんかありませんよ。それで、あなた方はこれから戦争をするような世の中にしないために何をしたらよいか。それはあなた方が人に思いやりを持つことなんです。人に嫌がるようなことを絶対にしない、世界中の人がそういう思いになったら、この地球の上から戦争はなくなるんですよ」と。そういうことを自分の体験から皆さんに話しております。

いろんな学校に行きます。小学校では、1年生から6年生まで集めて聞いてくれるとき、先生、非常に心配されるんですけどもね、でもよく聞いてくれるんですね。先生もびっくりされるんです。そして、後からいただく感想文には、ちゃんと私の言うことを聞いてくれたんだな、という文章たくさん来ますのでね。本当に子どものときからの教育は大切だなと思います。

愛せるような国を作らないで、愛国心を植えつけようとしても、それは駄目だと思うわけですね。

ありがとうございました。

（札幌市山の手「九条の会」学習会「女性たちの戦争体験」〈2006年8月19日〉の講演記録より。収録にあたって小見出しをつけた。なお越智晴子さんは会長職のまま2015年12月29日に逝去されました。編集委員会）